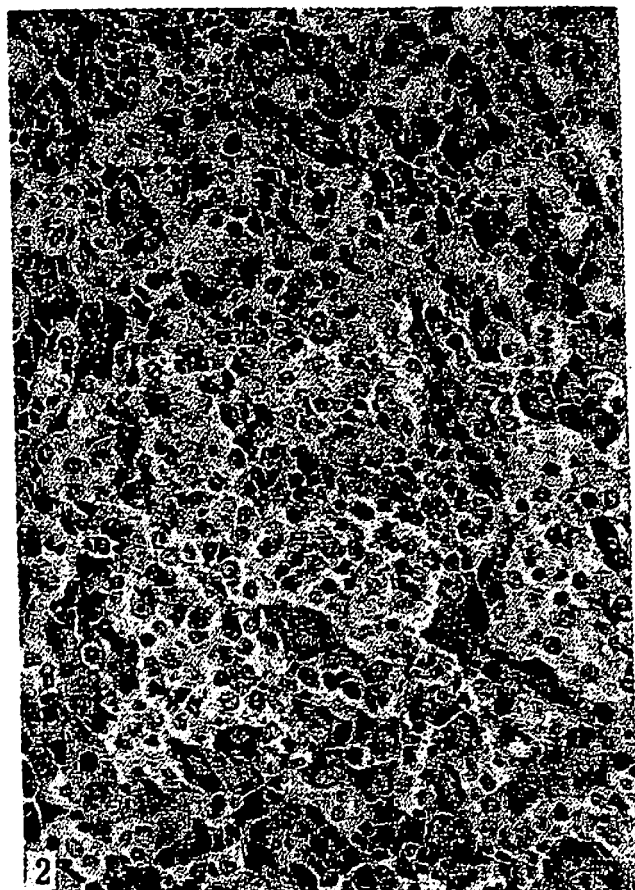
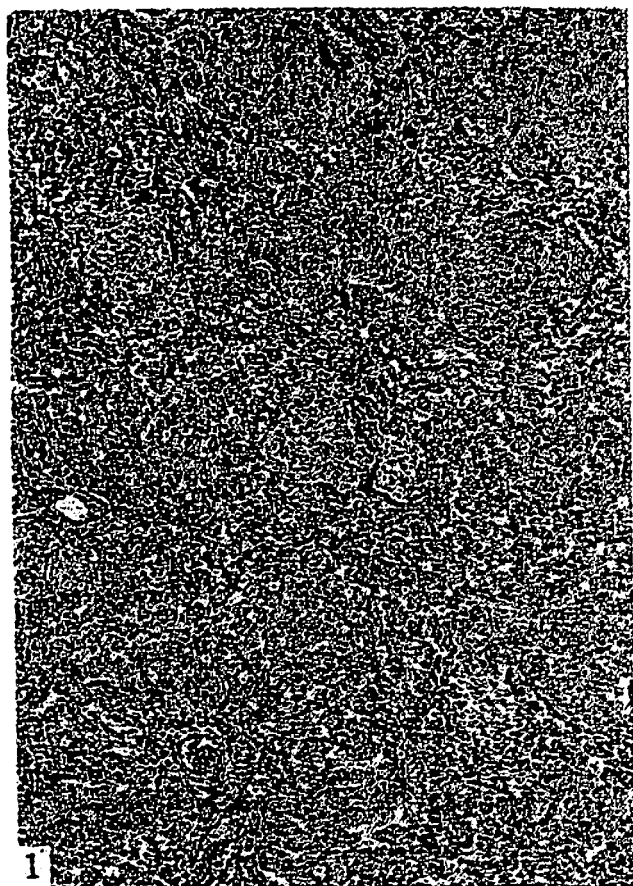


イルカの肝臓

東大農学部家畜病理学教室出題・第15回獣医病理学研修会標本 No.225



バンドウイルカ、♂、1才。1974年10月30日、伊豆川奈沖で捕獲され、2週間の生簀畜養後、伊東水族館に移され飼育された。栄養状態はかなり悪く削瘦が目立ち、皮膚には光沢が無かったが、食欲および動作はほぼ正常であった。栄養剤、抗生物質の投与が行なわれたが、状態は改善されず12月21日死亡、翌日剖検された。

剖検所見：頸部および背部体表にそれぞれ1ヵ所直径約3cmの肉芽腫様結節を認めた。肝臓の表面および断面には粟粒大～米粒大の白斑が散在し、とくに横隔膜面被膜下に多かった。脾臓はやや腫大し、断面において隆起する米粒大の白斑が密在していた。体表および腸間膜リンパ節はやや腫大し弾力を欠き硬かった。

肝臓の組織所見：肝実質内に大単核円形細胞を主とする結節が多発し(写真1, 2)、小葉周辺部および中間部にとくに多く見られた。結節を構成する大単核円形細胞の核は大型淡明で、円形ないし類円形を呈し、原形質の辺縁は比較的不明瞭で、ときに赤血球や細胞破壊物等を貪食していた。結節内には少数の好中球、リンパ球様細

胞および形質細胞の参加も見られたが、内部および周囲に結合織の増生はほとんど認められなかった。被膜近くに多い比較的大きな結節では中心部が壊死に陥っていた。結節内には細胞破壊物と思われる好酸性で無構造な小滴状物も認められ、これらが結節を構成する単核細胞に取りこまれている像も認められた。結節内にまきこまれた肝細胞は孤立または消失し、残存する類洞内皮がわずかに認められた。結節周囲の肝細胞の多くは細胞質に小胞状円形の空胞を有していたが、比較的良好に原形を保っていた。

結節内または周囲の大食細胞内にチオニン、ギムザ染色で青染、PAS陽性の球桿菌様粒子を認めたが、これらの粒子はMacCallumのGoodpasture's Gram染色およびZiehl Neelsen染色では陰性であった。

脾臓、浅頸リンパ節および皮下肉芽性結節部にも肝臓と同様の大単核円形細胞の著しい繁殖巣を認めた。

組織学的診断：小結節性繁殖性肝炎